

No.2820

先史時代東南アジアにおけるモノ・ヒト・技術とその移動に関する考古学的研究  
—新たな海域ネットワークモデルの構築を目指して—

早稲田大学文学研究科考古学コース 博士後期課程

深山絵実梨

本研究の目的は、先史時代東南アジアにおける地域間ネットワークの動態に関する新たな考古学的モデルを構築することである。東南アジアとその周辺地域の過去のヒトの動態をより具体的に復元し、より深く彼らの歴史を理解するために、従前提示されてきた二つの人類移動・移住のモデルに対して考古学的検証をおこなう。特に①出土数が最も多く、地域文化の特徴を最もよく表すといわれる土器資料、②南シナ海周辺地域から普遍的に出土する石製耳飾、③鑄造という高度な技術によって製作された青銅器、以上の三つの考古資料を研究の対象とする。

研究一年目である2017年度は、研究メンバー間のこれまでの研究概要・成果を共有するとともに、主にフィリピンにおける現地調査を実施した。2017年8月に実施した現地調査では、フィリピンにおけるカラナイ土器の存続年代が、従来申請者らが考えていたよりもかなり幅広い時期、地域にわたる可能性を確認した。

また、フィリピンにおけるカラナイ土器は、地理的・年代的要因によって器種や器形、文様構成がかなり多様化していることが予想される。具体的な年代は確かではないが、早いところでは2・3世紀ころから、遅いところでは陶磁器片とともに報告される例も少なくない。今後、発掘調査などに基づいて年代を確認する必要がある。2018年2月の現地調査では、ルソン島南部ケソン州、バタンガス州での遺跡踏査を実施し、ケソン州において調査に適した遺跡の存在を確認した。

また、カラナイ土器に関する調査の進展とともに、タイにおいてはカラナイ土器と金属器時代の南シナ海地域に典型的な石製耳飾が同時期に属するのに対して、ベトナムやフィリピンではカラナイ土器と石製耳飾が共伴する例はみられないことも明らかになった。